の文化の方向は、從來の漢文化を繼承してこれを維持し保存することに向けられ、治下の漢族をもこの方向に驅り立てたことはいふまでもない。從つて新工夫の下に新學問新文化を建設することよりも、先づ以て古典古文化への親炙保存解釋の方向に進むべきことは當然であつて、これが支那文化をして、古來その特徴として保守の形を取るに至らしめた大なる因由の一つであらうと思ふ。

かくの如く考へるならば、普通一般に認められるやうに、漢文化なるものは古來漢族によつて今日まで強く保守的に維持せられ來つたと見るよりも、實は支那に入り來つて政權を握つた外族である支那人によつて維持せられたのであると見るのが當つてゐるのではなからうか。凡そ史上に於て吾々が漢族の活動として普通に認めてゐる事象も、また同樣に實は漢族の力には非ずして、支那に據つた異族なる支那人の力に歸すべきものが少くないであらう。例へば元・清の如きは言ふに及ばず、史上漢族の大發展期と認められてゐる唐代の隆昌の如きも、またその反對の唐代の內亂の如きも、かゝる史觀の下に取扱はれるべきが妥當ではなからうか。

以上故白鳥博士の漢族の保守性と同化力とについての講述の一節を追念し、それに因んで敢て管見を述べたのは、實は現下の局面に於て、これが甚だ重要なる性質を有する攷究問題であると考へるに由るのである。若し愚見にして幸に大過なきを得るならば、漢族必ずしも特に保守性を堅持するものではないと共に、古來東方諸民族の上に及ぼされた漢族、もしくは漢文化の同化現象は、決して漢族の發揮した作用に依るのではなくして、東方諸民族自からが招致したところに外ならぬといふに歸せねばならぬ。

（東洋學報第二十九卷第三・四號、白鳥博士記念論文集、昭和十九年一月）